

首里城「書院・鎖之間（しょいん・さすのま）庭園」の復元について

国営沖縄記念公園事務所 首里出張所 ◎國場 善秀
○葭葉 次郎

1. 目的

首里城は1429年から1879年まで約450年続いた琉球王国の国王と家族の居住する王宮であり、王国統治の行政機関「首里王府」の本部であった。首里城内の多くが戦争等により消失したが、戦後、首里城公園として正殿をはじめとする復元整備がなされ、国営公園区域4.7haのうち、2.6haを開園している。

今回、復元検討委員会等の方針に基づき書院・鎖之間庭園（以下「庭園」という。）の復元手法として整理し、復元手法として今後の基礎資料とする事を目的とする。

2. 内容

書院・鎖之間は正殿に次ぐ、大規模な木造復元施設で「書院」は国王が日常の執務や来客をもてなすために、「鎖之間」は王子などの控所で、諸役の者たちを招き懇談するために使用されたとされ、公式の儀礼とは異なったもてなしが行われ、茶などを振る舞い国王や王子自身が身近に接することによって個人的な関わりを重視した場所だと考えられている。このような用途からも庭園は、書院・鎖之間の建物と一体をなす重要なもので、首里城内で唯一の本格的な庭園であった事が判明した。本研究では戦争等により消失した庭園の復元手法について整理するものである。

3. 結論

庭園部に現存する遺構露岩を使用しつつ、消失した部分の露岩形状の造形的特徴を再現する事や、庭園にふさわしい植栽の選定等を行う事で往時の景観がまた一つ甦った。今後、庭園及び露岩等の遺構消失部分において同様な条件とは一概にならないが露岩の再生方法等は復元整備の事例として参考とすることが期待出来る。

また、琉球建築と庭園が一体的となり、中国の使者や薩摩藩の役人を招き接待していた空間をより身近に体験できる施設となった事で来園者への魅力向上に寄与することが出来た。

4. 今後の課題

首里城唯一の本格的な庭園である事から、その風格と景観を維持していくための維持管理方法について委員会でも議論されたが、植栽形状の維持（蟠ったマツの仕立て方法等）、来園者にとって魅力ある庭園造りや細かなところなどの維持管理方法は更なる検討を行い対応していく必要がある。